

聴覚障害生徒における漢字の読み習得の発達

縦断的变化からの検討

茂木 成友

（東北福祉大学 教育学部）

KEY WORDS: 聴覚障害 漢字 読み

（目的）

日本語の語彙の約 7 割は、漢字二字熟語であり（Yokosawa & Umeda, 1988）、児童生徒の語彙獲得を考える上で、漢字二字熟語の習得の特徴を検討することは重要である。特に、聴覚障害児は漢字二字熟語の読み習得に困難を示すことが指摘されているため（鎌田・江刺家, 1991）、聴覚障害児における漢字二字熟語の読み習得の縦断的な変化を明らかにすることを目的とした。

（方法）

研究実施期間：X 年～X+1 年の 2 年間で実施された。

対象児：X 年時点で、Z 県特別支援学校（聴覚障害）中学部第一学年に在籍する 7 名、第二学年に在籍する 3 名、合計 10 名を対象とした。なお、重複障害児、下学年の内容を学習している生徒は対象から除外した。

漢字の読みテスト：小学校段階で学習する漢字で構成された漢字二字熟語の読みテストを作成した。なお、読みテストでは、180 題の漢字二字熟語が出題された。

分析の観点：X 年と X+1 年における漢字の読みテストの成績を比較し、漢字二字熟語の成績の縦断的な変化を検討する。また、正答・誤答傾向についても検討する。

倫理的配慮：本研究は、東北福祉大学研究倫理委員会による承認を得て実施された。

（結果と考察）

X 年における漢字の読みテストの成績をみると、対象児全体の平均は 120 点であり、X+1 年における対象児全体の平均は 136 点であった。対応のある t 検定を行ったところ、漢字の読みテストの成績の差が有意であった（ $t = 3.15$, $df = 9$, $p < .05$ ）。

各対象児の得点について Table 1 に示した。対象児ごとの縦断的な変化をみると、漢字の読みテストの成績が 6 点から 53 点まで伸びており、全員の成績が向上していた。なお、成績の伸びが著しい生徒（G 児）を除いて対応のある t 検定を行っても、成績の差が有意であったことから、聴覚障害児の漢字の読みの成績は、年齢の上昇に伴って向上していくことが示唆された。

Table 1 対象児別の漢字テストの成績(180 点満点)

対象児	在籍学年 (X 年時点)	X 年の成績	X+1 年の成績 ()内は前年比
A	1	82	99 (+17)
B	1	167	173 (+6)
C	1	153	159 (+6)
D	1	93	104 (+11)
E	1	120	131 (+11)
F	1	136	148 (+12)
G	1	100	153 (+53)
H	2	133	139 (+6)
I	2	88	115 (+27)
J	2	128	134 (+6)
平均		120	136 (+16)

単位は点

次に、正答・誤答傾向の縦断的な変化を検討するため、各対象児の回答状況を整理し、X 年に誤答した漢字のうち、X+1 年に正答に変わった漢字の数と、その逆に、X 年に正答した漢字のうち、X+1 年に誤答に変化した漢字の数を求めた (Table 2)。

Table 2 正答・誤答の経年変化

対象児	成績の 変化	誤答から正答に 変わった漢字数	正答から誤答に 変わった漢字数
A	+17	24	9
B	+6	7	1
C	+6	13	7
D	+11	23	12
E	+11	23	12
F	+12	17	5
G	+53	55	2
H	+6	15	9
I	+27	31	4
J	+6	18	12
平均		22.6	7.3

単位は個

X 年に比べて、6 点上昇した生徒が 4 名（B 児、C 児、H 児、J 児）いるが、この中でも、B 児のように正答から誤答に変わった漢字が少ない生徒もいれば、J 児のように正答から誤答に変わった漢字数が非常に多い生徒もいることが明らかになった。また、11 点～17 点上昇した生徒が 4 名（A 児、D 児、E 児、F 児）についても同様の傾向がみられ、F 児のように正答から誤答に変わった漢字が少ない生徒もいれば、D 児、E 児のように正答から誤答へと変わった漢字数が多い生徒もいた。

これらのことから、本研究の対象となった聴覚障害児については、小学校段階で学習した漢字で構成された二字熟語の読み習得を進めていることが示された。一方で、正しく読めていた漢字を読み誤るようになるなどの傾向も示された。これは、X 年時点で、憶測で回答して正解していた場合と、1 年間の学習を進める中で構成する漢字が持つ他の読み方を学習し、かえって読み誤りを起こした場合とが考えられる。いずれの場合においても、その漢字熟語の読み方や、その語彙を十分に理解していないことが背景要因として考えられ、漢字が持つ読み方と意味の双方を伴った着実な学習を促せるようにする必要が考えられた。

（引用文献）

Yokosawa, K., & Umeda, M.(1988). Processes In Human Kanji-word Recognition. *Proceedings of the 1988 IEEE international conference on systems, man, and cybernetics*, 377—380.

鎌田一雄・江刺家公也(1991) 聴覚障害児の漢字読み特性の調査. 聴覚言語障害, 20 (3), 85-93.

(MOTEGI Masatomo)